

随想

「宇宙からは国境が見えません」



宇宙開発事業団有人宇宙活動推進室長 毛利 衛

宇宙飛行を終えヒューストンに帰ってきた時、初めて日本の皆さんに伝えたメッセージのひとつでした。しかししばらくして日本に帰るまで、何気なく言ったその言葉が予想以上に大きい反響を呼び起こしていたとは知りませんでした。私としては他の国の宇宙飛行士が既に同じ事を述べていたので、それほど大きな意味を込めていたわけではありません。厳密に言うと実は国境が見えていたところも数カ所ありました。

例えばメキシコとグアテマラの国境は片方が白っぽく、片方が黒っぽい緑で、その境が直線的に地図で見る国境線そのままに、違う国であることが一目瞭然でした。このあたりは熱帯雨林が鬱蒼と茂る地域ですから人工的に開墾して初めて太陽の光が地面に反射して白っぽく見えるのです。片方の国が森林保護に熱心でもう片方がそうでない時にその国境線がはっきりと肉眼で見えたのでした。本来地図帳に画かれた国境線が人間の営みによって自然を変えたために宇宙からも見えるようになってしまいました。

スペースシャトルから昼間見える地球は表面を薄く覆う大気と表面をほとんど覆う水により青々と輝き、まさに水惑星の名前がぴったりにです。その輝く表面に肉眼で区別できる地球の生き物は、森林と珊瑚礁くらいですが、夜になるともう見えません。そのかわり、人間の存在を示す明かりが点々と陸地を埋め尽くしています。地球一周を90分で飛行する私達にとって、客観的に地球空間の限界を認めざるを得ない時代が始まった事を意味します。

一方、スペースシャトルの中では人間が数週間生きるために、空気、温度、エネルギー、水、廃棄物処理そして最低限必要な情報を最新の科学技術を用いた生命維持装置によってコントロールしています。この装置なしには人間は一秒たりとも宇宙空間で生きていけません。地上では大気を通して暖かく輝いて見えた太陽も宇宙では白くキラキラ無機質に光るエネルギーの固まりにすぎませんでした。また地上ではどんな黒い絵の具を使っても表現できないほどの深く吸い込まれそうな暗い

空間が宇宙です。地球のいかなる生命もそこでは受け入れられないと思われるほど過酷に静まりかえっていました。

40億年ほど前地球生命誕生の初期に海で生まれた遺伝子が、脈々と多様な生き物として受け継がれ、海から陸、そして空へと地球全体を覆って来ました。地球表面の4分の3を占める広い海は魚達が自由に泳ぎ回り、さらに広い空は鳥たちが自由に羽ばたいてきた空間です。より狭い陸地は、一見人間が支配しているように見えますが、ここに住む70%以上の動物種は昆虫です。ほかの動物達に比べ、最も古い時代に海から陸への進出に成功し繁栄してきました。

その陸地で人類は過去において、他の生き物たちが長い年月をかけて作り上げた肥沃な土壌、酸素の豊富な空気、エネルギーを生み出す化石燃料のお陰で今を生きています。しかし、自らの意志で他の生き物たちにはな

い、科学及び技術を発明しました。そして今や、それらの武器を身にまとい地球以外の生命に遭遇するかも知れない宇宙に行けるようになりました。

私達がこの地球に人類という生命体として存在しているのは過去40億年にも及ぶ、地球環境の変化がもたらした偶然と、それまでの生き物があらん限りの可能性を駆使して果敢に生き延びる挑戦をした結果です。彼らが地球生命の歴史に果たしてきた役割をたどると必然的に私達にも人間及び人類の位置と役割が見えてきます。過去の生命の歴史を謙虚に学び、人類文明の遺産を改めて地球生命誌的観点から見直す時、他の生き物が今まで果たし得なかった空間「宇宙」への更なる展開に挑戦することは、全地球生命体に活力を生み出す営みの原点になるはずです。

(もうり まもる)



見えないはずの国境が、人間の関与によって・・・
(宇宙から見たメキシコとグアテマラの国境付近)